

被害妄想的心性について

金子 一 史

問 題

これまで精神分裂病などの重篤な精神病理にはしばしば現実とはかけ離れた被害妄想を伴うことが指摘されてきた。しかし「部屋に入ったらみんなが笑っていたけれど、あれは自分のことを笑っていたのだろうか」とか「こちらから話しかけたのに返事をしてくれないなんて、あの人は私を無視しているのだろうか」などのような、他者の何でもない行動やしぐさを自分に向けられたものと感じ、自分に関連づけて物事を被害的に判断することは、一般にもみられると思われる。誰でも、何か恥ずかしいことをした後や、とんでもない大失態をしかした直後は、思い違いかもしれないとは感じながらも、周りの人が自分をあざ笑っているかのように感じるものである。本研究の目的は、このような誰にでもみられる被害妄想的な傾向を被害妄想的心性としてとらえ、検討することである。

本研究では被害妄想的心性を「一般青年に見られる自己関連づけで、自己とは無関係かもしれない出来事を自己に被害的に関連づける傾向」とした。このような、一般的に見られる被害妄想的心性に関連すると思われる研究は、Fenigstein (1984)、Fenigstein & Vanable (1992)、大淵 (1993) などがあげられる。大淵 (1993) は、人の言動の背後に自分に対する敵意や悪意を邪推することをパラノイド認知と呼び、パラノイド傾向と攻撃性の関連を示唆している。しかし、大淵 (1993) のパラノイド傾向は、他者に悪意を感じるという点を重視しており、他者の何気ないしぐさを自己に被害的に関連づけるという視点が含まれていないという問題があげられる。Fenigstein (1984) は過度な自己標的知覚 (overperception of self as a target) と自己意識との関連を示唆している。公的自己意識の高い人は、自己を社会的対象として意識する傾向が強いとして、実際には自己とは無関係に行われた他者の行動でも、自己を標的とするものではないかと疑いやすいとしている。しかし、Fenigstein (1984) の自己標的知覚は、自己とは無関係な他者の行動に肯定的な事象を含めており、必ずしも自己に被害的に関係づけられる事象のみに限ってはいないという問題があげられる。一方、Fenigstein & Vanable (1992) はパラノイアと自己意識との関連を示唆している。彼らが作成したパラノイア尺度は、私的

自己意識を統制した後の、公的自己意識と正の偏相関が見られている。しかし、彼らのパラノイア概念は、猜疑心と注察観を含んでおり一義的ではないと思われるのに加えて、その尺度には病理的な内容をかなり直接的に表現している項目が多く含まれているという問題があげられる。

そこで本研究では、予備調査を元に被害妄想的心性を測定するための尺度を新たに作成することとした。その際、被害妄想的心性の特徴である次の2点を重視することとした。第1に、被害妄想的心性は、一般青年に見られるものであり、その内容は他者と共有されやすいもので、現実離れは認められないことである。第2に、被害妄想的心性は、自己に被害的に関連づけるもののみに限定することである。

研究 1

目的：被害妄想的心性を測定するために独自の尺度を作成し、尺度の構成概念妥当性、及び信頼性の検討を行う。妥当性については、公的自己意識と正の相関を、私的自己意識とは無相関、自尊心とは負の相関、不信とは正の相関があると予測される。

方法：質問紙法による調査を実施。被調査者は大学生212名 (男性94名、女性116名、不明2名)。また、専門学校生77名を対象に、3週間の間隔で再検査を実施した。測定尺度：予備調査により独自に作成された被害妄想的心性尺度、自己意識尺度 (辻, 1993)、自尊心尺度 (山本・松井・山成, 1982)、および不信尺度 (天貝, 1995)。結果と考察：被害妄想的心性の因子分析の結果、14項目からなる1因子構造の被害妄想的心性尺度が構成された。因子構造は男女で違いは見られなかった。妥当性に関しては、私的自己意識と弱い正の相関が見られたが、他は予測通りの結果となった。再検査の結果、被害妄想的心性の十分な再検査信頼性が示され、被害妄想的心性は比較的安定した個人の特性として考えられることが示唆された。被害妄想的心性の妥当性及び信頼性については、ある程度確認されたと思われる。被害妄想的心性得点についての男女差を検討したところ、女子の方が男子より高い結果となった。私的自己意識得点を統計的に統制した後の、被害妄想的心性尺度と公的自己意識得点との偏相関を算出したところ、正の有意な偏相関が見られた。

被害妄想的心性について

しかし、公的自己意識を統計的に統制した後の、被害妄想的心性尺度得点と私的自己意識得点との間には、有意な偏相関が見られなかった。これらの結果から、公的自己意識は私的自己意識に比べて被害妄想的心性に与える影響がより大きいと考えられた。公的自己意識の高い人は、自己を他者からの観察可能な社会的対象として見がちであり、自己が他者にどう見られているか気にするほど、被害妄想的心性が高まりやすくなることが示唆された。

研究 2

目的：被害妄想的心性に関連が深い性格特性として、他者意識、個人・社会志向性を取り上げる。また、自尊心は他者意識と互いに影響を及ぼしあっていることが考えられるため、引き続き検討した。

方法：質問紙法による調査を実施。被調査者は大学生 205名（男性85名、女子117名、不明3名）。

測定尺度：被害妄想的心性尺度、他者意識尺度（辻，1993）、個人・社会志向性（伊藤，1993）自尊心尺度（山本・松井・山成，1982）

結果と考察：被害妄想的心性尺度の因子分析を行った結果、研究1と同様に1因子性が高いことが示された。他者意識尺度に関しては、因子分析の結果、内的他者意識と外的他者意識の2因子を抽出した。被害妄想的心性と内的他者意識及び外的他者意識の間には正の相関が、自尊心及び個人志向性との間には負の相関が見られた。重回帰分析の結果、内的他者意識及び外的他者意識は被害妄想的心性に正の影響を、自尊心及び個人志向性は負の影響を与えていることが示された。他者意識が高ければ、他者の視点を取得することができ、他者を共感的に理解していると考えられる。一方、被害妄想的心性と他者意識との関連が示されたことは、他者に敏感な人ほど被害妄想的心性が高まることを示唆している。これは、

他者のことを気にかけて他者の気持ちをくみ取ろうとするあまり、被害妄想的心性が高まっているとも解釈可能であることが示唆された。また、男女別に検討を行ったところ、男子では自尊心がより大きく被害妄想的心性に影響を与えていた。一方女子は、他者意識がより被害妄想的心性に影響を与えていた。女子は男子に比べて他者との関わりを重視している（伊藤，1995）とされ、その分他者を意識するほど被害妄想的心性が高まりやすいたことが考えられた。

被害妄想的心性得点についての男女差を検討したところ、有意な差は見られなかった。また、被害妄想的心性を従属変数として、性別、他者意識の高低、自尊心の高低による3要因分散分析を行った。その結果、他者意識及び自尊心の主効果が有意となったが、有意な交互作用は見られなかった。これから、他者意識と自尊心が被害妄想的心性に与える影響は、それぞれ単独であることが示唆された。

総合的考察

研究1で作成された被害妄想的心性尺度を元に、研究2において他者に敏感な人は被害妄想的心性が高い傾向にあることが示された。これは、被害妄想的心性は他者に敏感である表れであるとも考えられることを示唆している。この結果を病理的な被害妄想に適用するならば、一つの視点を得ることが出来ると思われる。つまり、病理的な被害妄想や関係妄想は、他者に並々ならぬ関心を示していることの表れであるとも考えられよう。この点は心理療法家や精神療法家によって指摘されていたが（荻野，1978；宮本，1982など）、今回一般青年を対象とした調査からもそのことが新たに示唆された。

被害妄想的心性得点の男女差については、研究1と研究2では異なる結果となり、今後慎重に検討していく必要があると考えられた。